

## 【添付地図解説】

## 原寸大レプリカ「赤水図」で吉田松陰の「東北遊日記」の足跡を辿ろう！！

佐川 春久\*

キーワード：長久保赤水、改正日本輿地路程全図、吉田松陰、東北遊日記

## 1. 「赤水図」原寸大レプリカ（表面）

嘉永4年（1851）12月14日の午前10時、吉田松陰は、江戸の長州藩松田藩邸を脱出、所用のための外出を装い脱藩した<sup>1)</sup>。それから、翌年の嘉永5年4月5日までの間、東北遊歴の旅に出た。ロシアの南下に備え、国内の海防の備えを視察に行ったという。この旅を記録した日記が「東北遊日記」である。今回、発行した表面の「赤水図」は、吉田松陰の「東北遊日記」の行程を記入した原寸大レプリカである。

この「赤水図」の第2版は、長久保赤水の生存中の集大成であり、幕末までのベストセラーであった。吉田松陰も水戸に1か月近く逗留した後、自筆の「東北遊日記」の中に、長久保赤水（1717～1801）を、長久保赤水先生との書いた記述が残されているので、その部分を現代語訳で紹介する（図1）。

〔前略〕廿二日、晴、阿久津、…宅を訪れ、長久保赤水が著わした所の龍子山記を見る。有云、應永廿三年、三月十五日、吉野帝末の孫、常翁が戸條伊勢守・中條播磨守・北条陸奥守を率いて常陸国に至る。永禄二年二月十八日、梅翁が薨り、常翁を経て大翁・覚翁・筑翁・梅翁に至るが子嗣無く絶える。阿久津宅を辞す。阿久津も亦相伴って送り出る。二塚を謁し赤浜に至る。長久保源五兵衛の墓を過ぎる。源五兵衛は農家の子、好みて天下を漫遊し、精学して地学を研く、後に抜擢されて士籍に登る。即ち長久保赤水先生なり、其子に及び復行きて農業に帰る。今分れて数家を為すに至ると云う。〕と書かれている<sup>2)</sup>。

また、これより後の嘉永6年（1853）2月11日付の大阪より家兄宛の手紙に「改正日本輿地路程全図之れなくては不自由故、当地にて相求め申し候、値三百八拾文夫れ故、御送り成され候に及ばず候」と書いている<sup>3)</sup>。この手紙以前の東北遊歴の旅の時に、「赤水図」を持っていたかどうかは不明だが、その後の諸国遊歴の旅である東海や近畿周遊、更には、中仙道から江戸へ、浦賀、そして、長崎の旅などには必要不可欠な地図であったと思う。

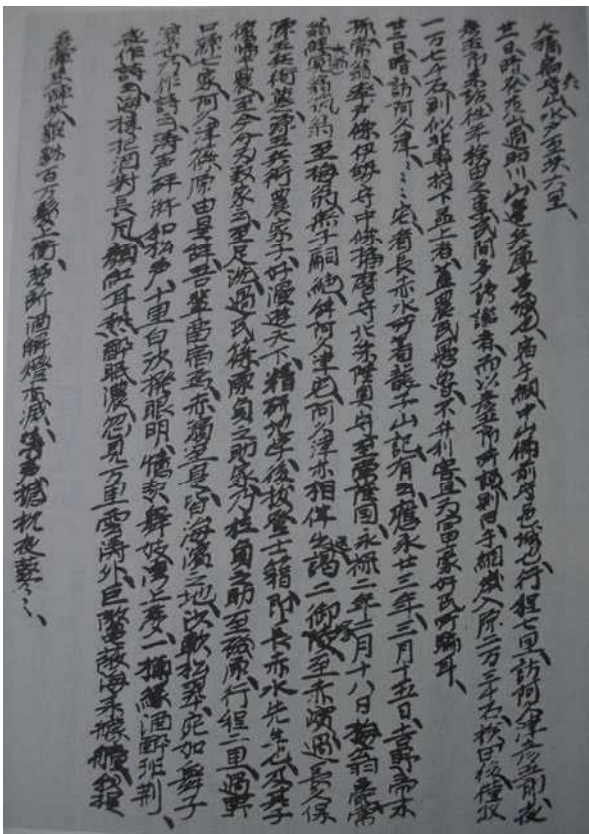
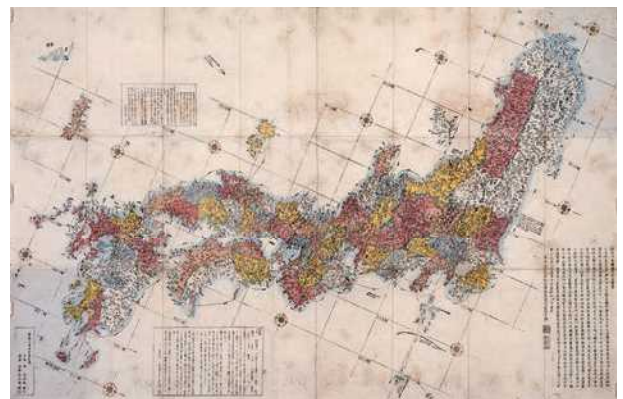


図1 「東北遊日記」嘉永5年（1852）正月22日

図2 『改正日本輿地路程全図』第2版  
高萩市歴史民俗資料館蔵（長久保赤水顕彰会寄贈）  
84.6 × 128.8cm

\*長久保赤水顕彰会会長

初版図との大きな違いとして海路や郡名の記入、図の左上の潮汐考証部の付加などが挙げられる。同じ第2版でも本図は、【大島。三宅。利。新。志貴。神集。御蔵。是日伊豆七島】と【十里，三里】などの里数と海路も書かれており、三宅島なども部分的に板木を直して刊行していることがわかる（図2）。また、初版では12あった海上のコンパスローズが、第2版からは10に減っている。長久保赤水の『改正日本輿地路程全図』（通称『赤水図』）は、江戸時代の庶民にとっては、最も身近な日本地図であった。なぜなら、伊能忠敬（1745～1818）の『大日本沿海輿地全図』（通称『伊能図』）は、江戸幕府の秘図であったからだ。幕府の一部高官は見る事が出来たが、江戸時代の庶民は勿論、明治維新に奔走した幕末の志士なども、見る事が叶わなかった地図なのだ。一方の赤水図は、江戸後期の約100年間のロングベストセラーとして最も利用され活用された地図である。

また、伊能忠敬も水戸の長久保赤水が居ながらにして地図を作れたことには非常に感心すると言っていた。

これは、小宮山楓軒『懷宝日札』の中に「【大意】伊能勘解由は幕府の命令で日本地図を製作している。人に話して私は諸州を歩き回って実測で地図を作っているが、非常に難しいと感じる。水戸の長久保赤水が居ながらにして地図を作れたことには、非常に感心する」とある。また、忠敬も赤水図を所持しており、測量にも携帯して<sup>4)</sup>、随時参照している<sup>5)</sup>。

赤水は晩年郷里赤浜に帰り、享和元年（1801）7月23日に85歳で没した。忠敬はその10日後の8月3日に第二次測量で当地を通過した。『測量日記』に「赤浜村、長赤水の出し村なり」と記し、敬意を表している。

次に、図の右下に書かれている柴野栗山の序文を紹介する（図3）。「およそ図は、その大事（大切）なること、赤水図より大事なものは無い。しかも、またその難しいこと赤水図より難しいものはない。つまり、その大きいものでは、すなわち、体国経野（都市と村里を区画経営すること）、控御（人々を治め取り締まること）、攻守（攻め守ること、軍事）の政治であり、細かいものでは、すなわち、読書、考古、探勝（観光）、按蹟（史跡を調べる）の学問である。だから、一日として欠かしてはいけないものである。しかし、山の背向（離れることと従うこと）、水の迂直（曲がっているか真っ直ぐか。流域の様子）、わが儕（仲間）孟浪（おろそか。とりとめがない）にして、躬ら（自分で）親しくその地を履み（歩き）、なおかつ、数歩

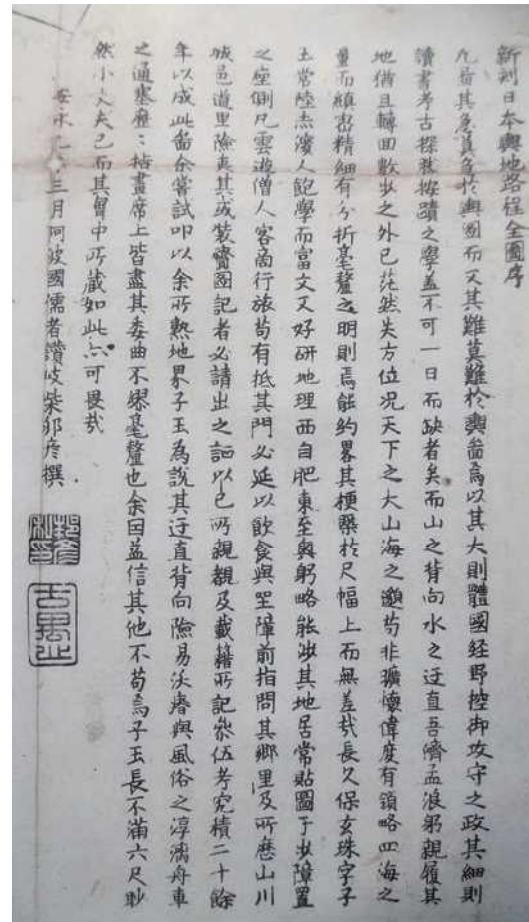


図3 『新刻日本輿地路程全図序』（赤水図の序文）

の外に転回して、すでに茫然として方位を失うばかりである。いわんや天下の大山海の遑（広々として遙かな様子）なることはいうまでもない。苟も曠懷偉度（広々とした立派な心。大きな度量）がなければ、四海の量を領略（意味を理解すること）することはできない。しかし、縝密精細（綿密で非常に詳しい）、豪釐（きわめて少ない）を分析する明則がある。よくその梗概（あらまし）を尺幅の上に約略（表現）して差なし。長久保玄珠、字は子玉、常陸赤浜の人、飽学（学問を十分に修めている）にして文に富む。また地理を窮めることを好む。西は肥（肥前…長崎）から東は奥（奥州）に至り、自分の足で歩きその地に涉った（水を越えて行った）。居常（常に）図を歩障（幕を張って堺すること。またその物）に貼り、これを座側に置く。およそ雲遊僧人（行脚僧）、客商行旅の苟もその門に抵る（至る）者があれば、必ず延くに（客を引き入れること）飲食を以てし（もてなし）、ともに障前に座し、客人の郷里及び客人の歴する（経回る）所の山川、城邑（都会）、道里、險夷（険しさと平らかと）を指問し、その或いは装して図記をもっている者に

は、必ずこれら図記を出させて、これによってすでに親しく観る所、及び載籍（書物のこと）に記する所を証（検証）す。参伍考究（三々五々種々研究を深める）二十余年を積み、以て此図を成す（完成させた）。余（私は）かつて、余の熟しき（良く知っている）地界の所を以て試叩（試しに尋ねてみた）した。子玉（赤水）為にその迂直背向、陰易、沃瘠と風俗の淳漓（あついとすすいと。淳厚と軽薄と）、舟車（船と車。転じて水陸の交通機関）の通塞（航行の便不便）を説くや、歴々と席上に指画（指で描いて懇ろに示し教える）して、皆その委曲（詳しく細やか）を尽して豪釐も繆らなかつた。余、因って益々その他も信じ、かりそめにしなかつた。子玉、長六尺に満たない渺然（小さい様）たる小丈夫、すでにしてその胸中に蔵するところ此のごとし。また畏るべきかな。安永乙未三月阿波国儒者讃岐柴邦彦撰 花押 花押

（安永四年…一七七五年，柴野栗山撰）

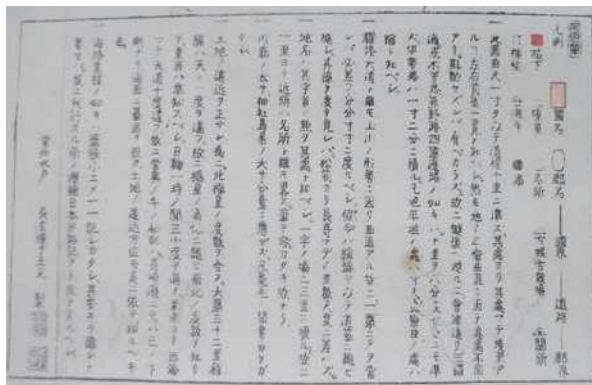


図4 『改正日本輿地路程全図凡例』（赤水図の凡例）

続いて、図の左下（原図では右下の貼紙）にある凡例について紹介する（図4）。

- 一 大きな道でも山川の形勢により曲直があるので、同じにはできない。細かく測りなさい。たとえば絹糸を道筋に沿って置き、その長さを測れば、松前から長崎までの里数はその長さに合う。
- 一 地名の頭の字の所が、その場所である。一文字で三里になる。だから一里より近い所は、名所であっても省略する。筆が入られないからだ。
- 一 川筋の太さや神社鳥居の大きさは実際とあっていない。細かい所は書分けることが難しいのだ。
- 一 土地の遠近を正確にするために、北極星の高度を合わせている。およそ三十二里離れば、天の一度になる。だから極星の高低によって南北の度数

（緯度）を知り、東西の度数（経度）を推し量るように。太陽は一時（二時間）の間に三十度を過ぎる。東海より西海まで天道十度違う。だから東日本の午の初刻（午前十一時頃）は、長崎辺りでは、巳の下刻（午前十時二十分頃）。海面に方眼を引いた。土地の遠近方位もこれによってわかる。一 海路の距離は、図が小さくて書けない。詳しいことを知りたい時は、すでに刊行されている増補日本汐路記があるので、それを見るように。

常州水戸 長玄珠子玉父 製 花押 花押

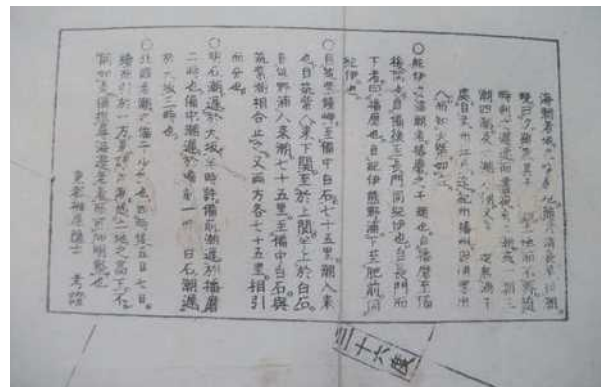


図5 『改正日本輿地路程全図』第2版（汐路）

続いて、図の左上にある文について紹介する（図5）。海の潮は大地の呼吸である。月の満ち引きに随い、早朝には潮という。晩には汐という。しかし、その干満は土地により異なっている。時刻の遅速に随って昼夜の二潮がある。或いは、一潮、三潮、四潮、及び七潮、八潮もある。また海辺に満干が無い所もある。武州江戸から紀州播州までに、月の満ち欠け、出入で大よそのことがわかる。左のとおりである。

- 紀伊の満潮は、播磨の干潮である。播磨から備後までも同じである。備後から長門に至る紀伊に同じである。長門より下は、播磨に同じである。紀伊熊野浦から下肥前に至る紀伊に同じである。
- 筑紫鐘岬から備中白石に至るまで、七十五里。潮入り来る。筑紫から下関に入り来る。上関に至り半ば白石に上る。熊野浦から入り来る潮、七十五里。備中白石に至り、筑紫の潮と相合い之を止む。又両方各七十五里、相引いて分る。
- 明石の潮。大坂より遅れる事半時ばかり。備前の潮、播磨に遅れる事二時となる。備中の潮、備前に遅れる事一時となる。白石の潮、大坂に遅れる事三時となる。



図6 『改製日本分里図』(赤水図の原図) 高萩市歴史民俗資料館蔵(長久保甫氏寄贈)  
84.6 × 134.8cm

○北国は潮の満干、少しばかりある。時候に因りて五日、七日続けて一方に引く。是を片潮と謂う。土地の高下に随い、同じでない事かくの如し。猶、海辺の老者に推尋して、明察を加えるべきである。  
東都榊原隠士 考鑑

## 2. 赤水図の変遷について(裏面)

この『赤水図』を制作したのが、水戸藩赤浜村(現在の茨城県高萩市赤浜)の農民出身であった長久保赤水である。以下は、裏面の6枚の赤水図の説明である。

赤水は、赤浜村で20年以上の歳月を費して、この『改製日本扶桑分里図』(赤水図の原図)を製作した。胡粉を使った修正痕や和紙を何枚も重ねて書きなおした跡が残されている。そこには右下に貼られている凡例に、明和5年(1768)の年号が書かれている。

しかし、今回の文化庁の調査で、扶桑(二文字ミセケチ)に付けられた○は消去のしるしであると分かった。今までは、扶桑を強調しているものばかりと思っていたので『改製扶桑(日本)分里図』と表記してきたが、今後は『改製日本分里図』(図6)と改めて表記することになった<sup>6)</sup>。

『赤水図』は測量図である『伊能図』と違い、編集図である。さまざまな情報を集めた情報収集能力と編修能力に優れていたと思われる。

家の前の奥州道浜街道の旅人を呼び止めて、食事やお茶を振る舞いながら、その人の地元の地図や地図情報を聞いていたといわれている。

また、水戸彰考館の図書係だった立原蘭溪(翠軒の父)からも地図情報ももらっている。水戸藩が集めた全国の国絵図なども赤水は、見ていると思われる。

この長久保赤水のご先祖様は、九州の大名で、現在

の大分県地方を治めていた大友能直の流れを汲んでいる。叔父との戦に敗れて東国に逃げ、現在の静岡県駿東郡長泉町の長久保城を3世代にわたり治めていたので、大友姓を改め、長久保姓を名乗った。

しかし、東西の交通の要所だったため北条氏綱に滅ぼされ、さらに、東へ逃れ、ついには赤浜村で農業に従事する事になった。この長久保城は、秀吉の小田原城攻めの時にも重要拠点として使用された。

赤水は、子どものころから好奇心が強い子だったといわれているが、11歳までに祖父母や弟、両親を亡くし、天涯孤独の身となった。その赤水が、10歳の時に後妻としてきた継母とともに農業をしながら学問に励んでいる。松岡(現在の北茨城市・高萩市・日立の地域)七賢人の一人として、14歳から儒学(朱子学)を学んだ。30代後半で儒学を大成して、その後、中国の天文・地理学を学んでいる。

『天経或問』天の上部の赤水自筆の朱書きの書込みには、赤道や黄道、緯度、経度などの文字が見える



図7 『天経或問』天に見られる赤水自筆の書込み  
高萩市歴史民俗資料館蔵(長久保赤水顕彰会寄贈)

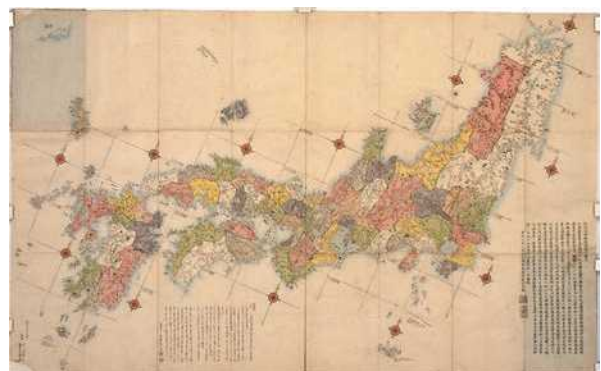


図8 『改正日本輿地路程全図』初版 高萩市歴史民俗資料館蔵(長久保赤水顕彰会寄贈)  
81 × 131cm



図9 『改正日本輿地路程全図』第2版 高萩市歴史民俗資料館蔵（長久保甫氏寄贈）83 × 128.5cm

（図7）。つまり、赤水は、すでに天文学の知識を日本地図に用いているのである。

図8の『改正日本輿地路程全図』の初版は、安永8年（1779）に完成、翌年の春、大坂で出版された。この図は、10里（約40km）を1寸（約3cm）とする約129万6千分の1の小縮尺の日本図である。それまでの刊行日本図とは異なり、緯線と経線を引いた点で、画期的な刊行日本図である。大坂の書肆浅野弥兵衛より刊行。讃岐国の儒者柴野栗山（1736～1807・寛政の三博士）の序文があり、赤水は栗山と学問的交流があったことがわかる。高萩市歴史民俗資料館蔵の安永8年版『改正日本輿地路程全図』は、4点あるが同じ刊行年であっても、何度も赤水が修正を加えていたことがわかる。本図には、右上部の大島・小島が書かれていない。また、下北半島は鳶口形に描かれており、4点の中では最も古いものであることがわかる。さらに、地名情報なども約4,200が掲載されている。

次に、赤水図の集大成ともいえる第2版である（図9）。高萩市歴史民俗資料館蔵の寛政3年（1791）『改正日本輿地路程全図』の第2版は3点あるが、この図

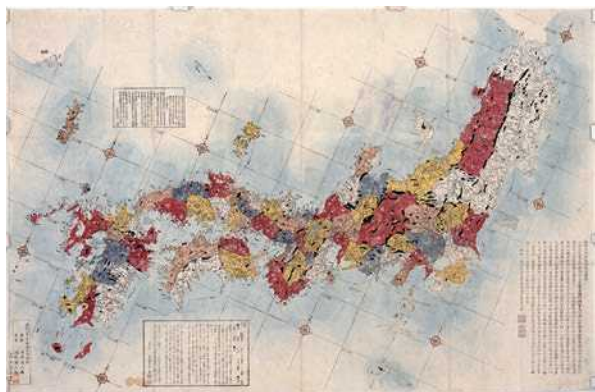


図10 『改正日本輿地路程全図』第3版 高萩市歴史民俗資料館蔵（横山功氏寄贈）129.7 × 85cm

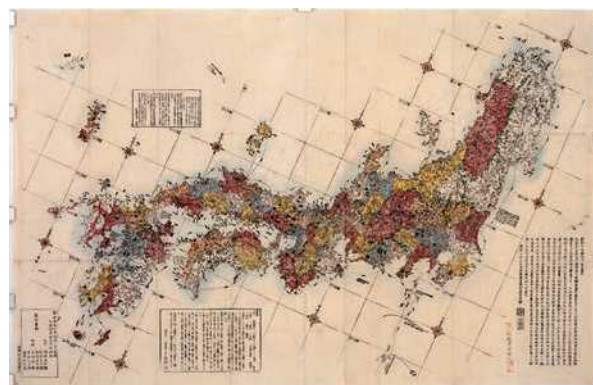


図11 『改正日本輿地路程全図』第4版 高萩市歴史民俗資料館蔵（横山功氏寄贈）134.6 × 87cm

は着彩試作品と思われる。

初版図との大きな違いとしては、海路（港から港までの距離）や郡分図（郡名の記入）、図の左上の潮汐考証部の付加などが挙げられる。

また、第2版から四ツ倉沖には、初版にはない阿伽井（関伽井）嶽龍燈の書き込みが見られる。

さらに、地名表記などの情報量も飛躍的に増加し、国の色分け彩色も変化した。赤水が存命中に編集したのは、集大成ともいえるこの第2版図までである。

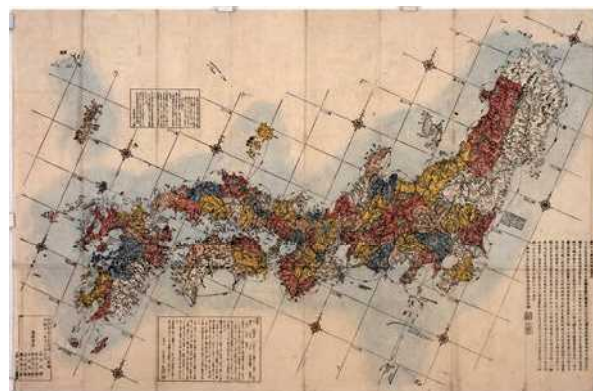


図12 『改正日本輿地路程全図』第5版 高萩市歴史民俗資料館蔵（横山功氏寄贈）130.4 × 85.7cm

初版とこの第2版を見比べてみると、地名情報なども約6,000と飛躍的に増加している。同じ赤水図でも初版とは、全くの別物であることがわかる。

本図では、【是日伊豆七島】となっており、伊豆七島への里数は、まだ、入っていない。図10は赤水没後出版された地図である。この第3版からは、大坂だけでなく江戸でも販売され、東都 須原屋茂兵衛、浪華 浅野弥兵衛とある。その後は、同じ第3版でも、

東都1軒、浪華5軒と次第に販売する書肆（書店）も増えて、幕末までのベストセラーとなった地図である。

図11も赤水没後に出版された地図である。この天保4年の第4版では、江戸 須原屋茂兵衛、大阪 松村九兵衛、柳原喜兵衛、吉田善蔵、赤松九兵衛、浅野弥兵衛とあり、江戸1軒、大阪5軒となっている。

図12も赤水没後に出版された地図である。この天保11年の第5版では、浪華書林 森本太助、浅井(ママ)吉兵衛、柳原喜兵衛、吉田善蔵、前川善兵衛、橋本徳兵衛とあり、浪華の6軒となっている。

## 注

- 1) 海原 (2003) 「遊歴の道を辿る」 P125
- 2) 長久保赤水顕彰会 (2014) 長久保赤水書簡集現代語訳吉田松陰自筆の「東北遊日記」の一部から P149
- 3) 長久保 (1978) 「地政学者 長久保赤水伝」 P194
- 4) 伊能 (1814) 「江戸日記」文化11年9月4日
- 5) 佐久間 (1998) 「伊能忠敬測量日記三」 P120 文化7年5月7日・P128 文化7年6月18日
- 6) 文化庁文化財第一課発行 (2020) 「長久保赤水関係目録」 P1

## 参考文献

- ・海原徹 (2003) : 「江戸の旅人吉田松陰」. ミネルヴァ書房, 378pp.
- ・長久保赤水顕彰会編 (2016) : 「長久保赤水書簡現代語訳」. 長久保赤水顕彰会, 171pp.
- ・長久保片雲【源藏】 (1978) : 「地政学者 長久保赤水伝」. 暁印書館, 457pp.
- ・伊能忠敬 (1814) : 「江戸日記」.
- ・佐久間達夫 (1998) : 「測量日記三」. 大空社.
- ・文化庁文化財第一課 (2020) : 「長久保赤水関係目録」. 76pp.

(受付け 2020年3月9日 受理 2020年6月30日)

- ・地図への問い合わせ先は以下のとおり  
長久保赤水顕彰会事務局 佐川春久  
携帯：090-1846-6849  
Eメール：haruhisasagawa@yahoo.co.jp  
<http://nagakubosekisui.org/> (お問い合わせ欄)